



さわい・よしろう 1928(昭和3)年静岡県雄略町(現浜松市)生まれ。同県浜松工業学校(現浜松工業高校)紡織学科を卒業後、三重県四日市市の紡績工場に就職し、54年から三河地区労働組合協議会(当時)の事務職員になった。58年から四日市公害の記録活動を開始。67年から約30年間、患者の声や住民運動の

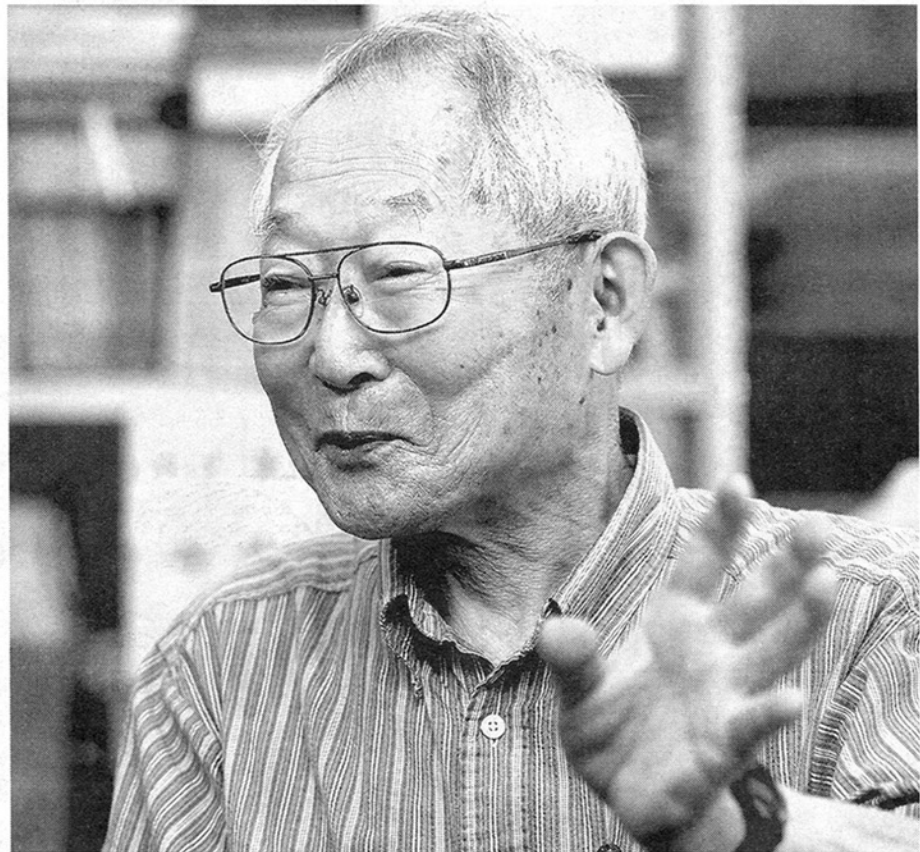
様子を載せた方り版文集「記録公害」を発行。71年には大学生らと「四日市公害と戦う市民の会」を結成、月刊「三三」紙「公害トマレ」も8年間発行した。公害問題が沈静化した97年、語り部団体「四日市再生 公害市民塾」を設立した。最近、回顧録「方り切りの記 生活記録運動と四日市公害」(影書房)を著した。



日本の環境行政を動かした三重県四日市公害訴訟の判決から四十年を迎えた。反公害記録家、沢井余志郎さん(83)は、判決前から地元で四日市公害を記録し続けてきた。患者の苦しみを肌で感じ、「悲劇を繰り返さないで」と語り継ぐ活動に専心してきたその持続力はどこから生まれているのか。(佐野周平)

判決は企業だけでなく行政の責任にも言及する画期的なものでした。公害との接点は。

公害被害が表面化し始めた昭和三十年代後半、地元の地区労組協議会で事務職員をしてきた。協議会でも反公害運動を展開していたが、事務的にこなしている面が強かったかな。ぜんそくを苦に自殺した公害患者の追悼集会で、ある男性患者に「何も知らずに簡単に反公害と言った。患者が発作で苦しんでいる様子を見てみる」とたしなめられた。その通りだと思ひ、多くの公害患者が入院していた塩浜病院に行ったのが始まりだった。



写真・柳田大慈

◆お断り 次回「あの人に迫る」は8月4日に掲載します。

# 今も患者はいる やりきれぬ思い

悔することはありますか。

二次訴訟を簡単に諦めたことが今でも悔やまれる。一次訴訟で勝った際には、公害患者の子どもを持つ母親たちが二次訴訟を目指した。ただ、子どもは小児ぜんそくもあるため公害を引き起こした亜硫酸ガスとの因果関係を立証することが難しい。勝算が薄いためには弁護団も消極的だったんでしよう。結局、企業との直接交渉になり、ただの金取りで終わってしまった。あれだけの偉業を成し遂げたのに、四日市公害をめぐる市民運動が今も弱いのは、あそこで闘いきれなかったからだと思っている。

## 沢井 余志郎 反公害記録家

裁判では原告側を支援してくれた研究者や議員たちが、その後行政や企業

からポストを与えられ、そ

つち側の人間になってしまったといふことも。親しくしていた原告患者の野田之さんに呼び出され、「公害で名を上げたエライさんが、今じゃ企業や行政に利用され、わしをいじめるようになった。どうなのよんや」と怒られた。私も何も言えず、ただ謝るばかりだった。このような人間の性根が四日市公害のような悲劇を引き起こす元凶だと思ふ。こういった側面も後世に伝えていきたい部分です。

半世紀近く、沢井さん

を聞き取ってきたものは何ですか。これを聞かれるといつも答えに困ってしまうが、自負心でしょうか。誰よりも



判決から四十年後の現在

「臭い魚とぜんそく」という四日市公害の主な被害はほとんど収束した。「公害は今でもひどい」と言っ

患者に寄り添ってきたし、私しか知らないことがいっぱいある。四日市公害の記録を伝えることは私にしかできないと思っている。そんな孤独感が強いが、私を支えてくれたのかもしれない。

患者とのつながりも大きな要因の一つ。患者たちの苦しむ場面を何度も見てきた。効果があると聞いて焼いた人間の骨を粉にして飲み続ける患者もいた。そんな姿を見ながらやりきれない思いを何度も感じた。誰かが後世に伝えないと、という責任感もあった。

最終笑顔で受け答えする沢井さんが、取材中に何回か目を合わせるシーンがあった。どれも公害患者の苦しむ様子を振り返る時だった。「やるせない気持ちでしたよ」。

患者でも遺族でもない沢井さんが、四日市公害の記録活動を半世紀近く続けてきた理由がこの一言に凝縮されているように

インタビューを終えて

感じた。

第一線で活動してきた沢井さんも来月には八十四歳を迎える。世代交代の時期は迫ってきた。沢井さんが果たしてきた役割と功績が大きいだけに「誰が沢井さんの後を担うのか」。四日市公害の歴史を語り継ぐ上で、最も重要かつ解決が困難な課題かもしれない。

あなたに伝えたい

「公害は今でもひどい」と言っるのは簡単で、「公害はよくなった」と言っるのは勇気が要る。

「臭い魚とぜんそく」という四日市公害の主な被害はほとんど収束した。「公害は今でもひどい」と言っ

患者に寄り添ってきたし、私しか知らないことがいっぱいある。四日市公害の記録を伝えることは私にしかできないと思っている。そんな孤独感が強いが、私を支えてくれたのかもしれない。

最終笑顔で受け答えする沢井さんが、取材中に何回か目を合わせるシーンがあった。どれも公害患者の苦しむ様子を振り返る時だった。「やるせない気持ちでしたよ」。